

日本における外国人児童のウェルビーイング(2)

-日本語能力に着目したQOL-



野村あすか¹・松本真理子²・坪井裕子³・鈴木伸子⁴・垣内圭子⁵・大矢優花⁵・二宮有輝²・稲垣美絢²・森田美弥子²
¹(日本福祉大学)²(名古屋大学)³(名古屋市立大学)⁴(愛知教育大学)⁵(愛知医科大学病院)

問題と目的

われわれは、日本における外国人児童のウェルビーイングに関する一連の研究を行っている。先行研究として蒔田ら(2011)では、外国人児童・生徒は日本人児童・生徒よりも自尊感情が高く、学校生活における満足感が低いことが明らかにされたが、外国人児童・生徒のサンプル数が少ないという課題が残された。

本研究では、X県において外国人児童の在籍率の高い小学校を対象とし、児童の適応に影響を及ぼすと考えられる日本語能力に着目して外国人児童におけるQOLの検討を行うことを目的とする。

方法

1. 調査対象者

X県内5校の小学4~6年生計1,106名(日本人児童809名, 外国人児童297名)を対象とした。

2. 調査内容

①QOL:小学生版QOL尺度(柴田ら, 2003)を用いた。「身体的健康」「精神的健康」「自尊感情」「家族」「友だち」「学校生活」の6領域24項目, 5件法で構成される。得点が高いほどその領域のQOLが高いことになる。

②日本語能力:学級担任に対して、外国人児童の日本語能力を3段階で評定するよう求めた(表1)。

表1 外国人児童の日本語能力水準

水準	分類基準	本研究における区分
1	当該学年教科書は困難で、個別の日本語指導がかなり必要。会話はできるが授業はついていけない。	日本語能力低群
2	1と3の中間程度の日本語能力。基本は当該学年教科書であるが、何らかの個別指導や取り出し授業による指導を行っている。	
3	当該学年の教科書(国語)を使用し、通常学級でほぼ個別支援なく授業可能。	日本語能力高群

3. 手続き

2016年7~10月, 各学級で担任教師の読み上げにより集団実施した。

結果

1. QOL尺度の得点の比較

日本人児童と外国人児童2群(日本語能力水準の低群・高群。以下、「低群」「高群」とする)の得点を一要因分散分析により比較した(図1)。

- 「**精神的健康**」と「**友だち**」は、低群の得点が他の2群よりも有意に低かった($F(2, 1059)=5.08, p<.01$; $F(2, 1044)=6.92, p<.01$)。
- 「**学校生活**」は、低群と高群の得点が日本人児童よりも有意に低かった($F(2, 1068)=9.69, p<.001$)。

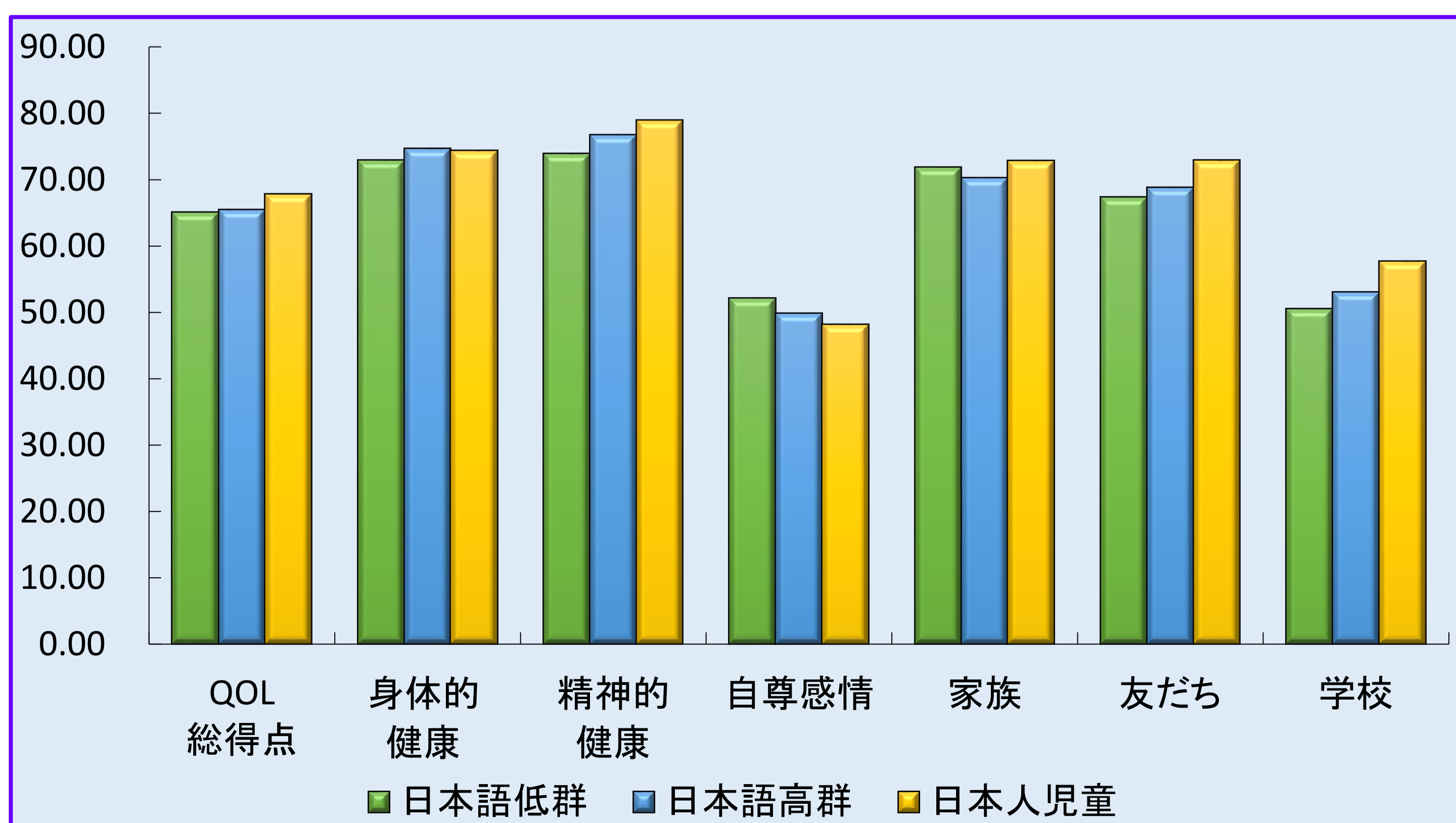


図1 QOL尺度の得点

2. 尺度項目ごとの検討

有意差の認められた下位尺度の各項目は、「いつも」と「たいてい」への回答を「ある」に、「ぜんぜんない」と「ほとんどない」への回答を「ない」に変換し、群(3)×回答(2)のクロス集計表を作成して χ^2 検定を行った。

- **精神的健康**:「たのしかったし、たくさんわらった」(図2-1)では、低群に「ない」が多く、「なにもないのにこわい感じがした」(図2-2)では、低群と高群に「ある」が多かった($\chi^2(2)=6.74, p<.05$; $\chi^2(2)=12.73, p<.01$)。

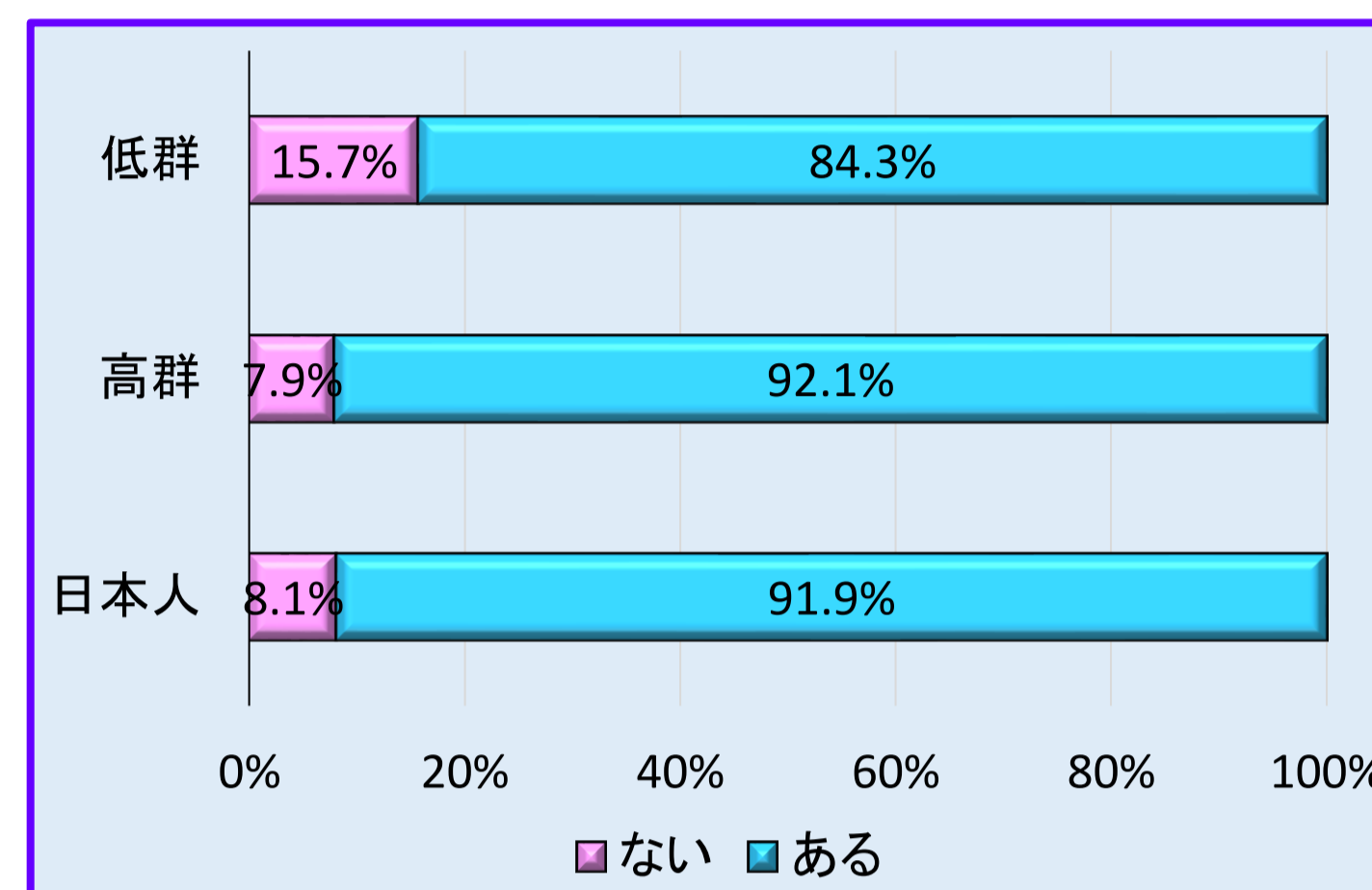


図2-1 たのしかったし、たくさんわらった

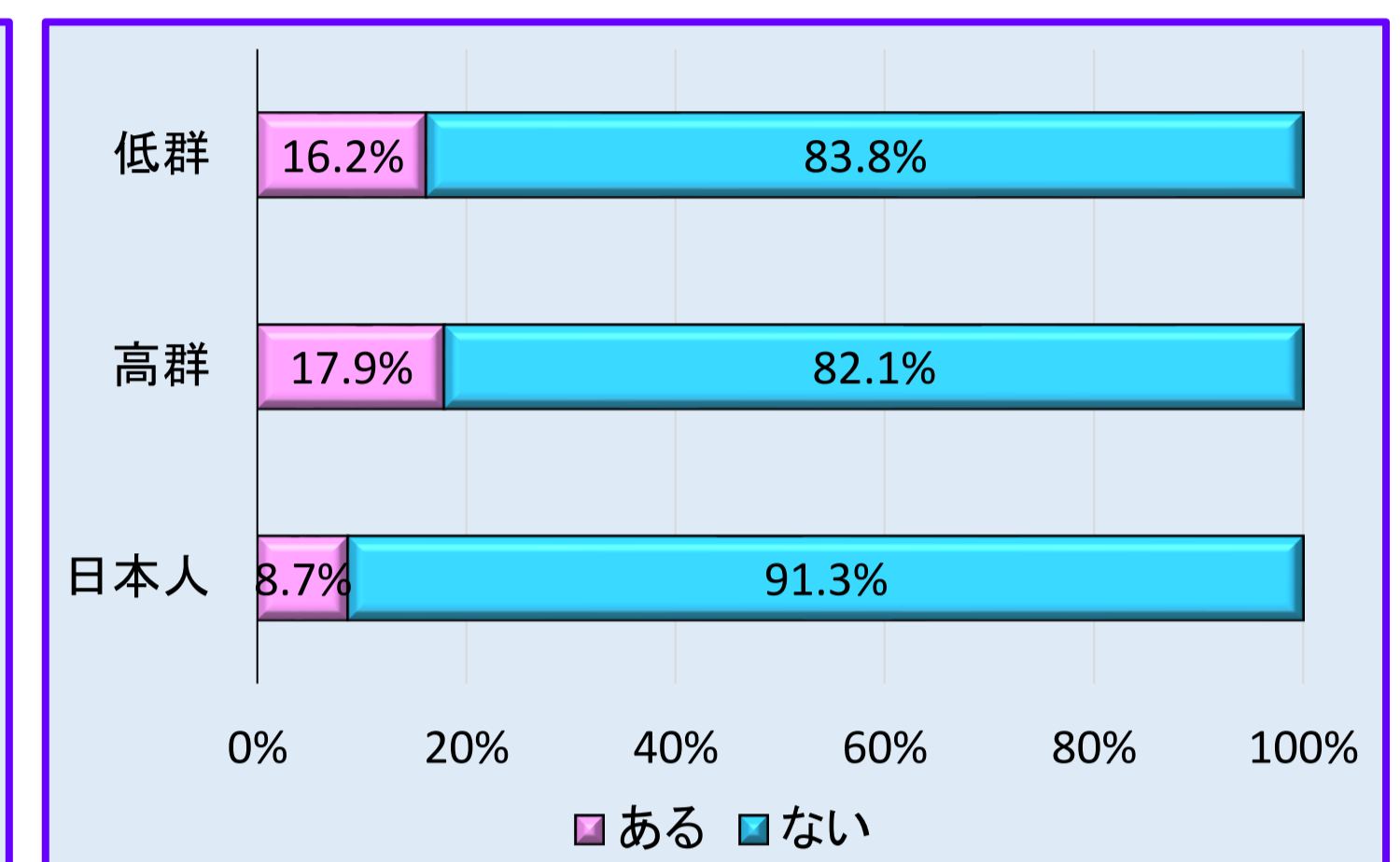


図2-2 なにもないのにこわい感じがした

- **友だち**:「ほかのともだちはわたしのことをすきだとおもった」(図2-3)では、低群に「ない」が多く、「ほかのこどもたちとくらべてかわっているようなきがした」(図2-4)では、低群と高群に「ある」が多かった($\chi^2(2)=10.61, p<.01$; $\chi^2(2)=23.79, p<.001$)。

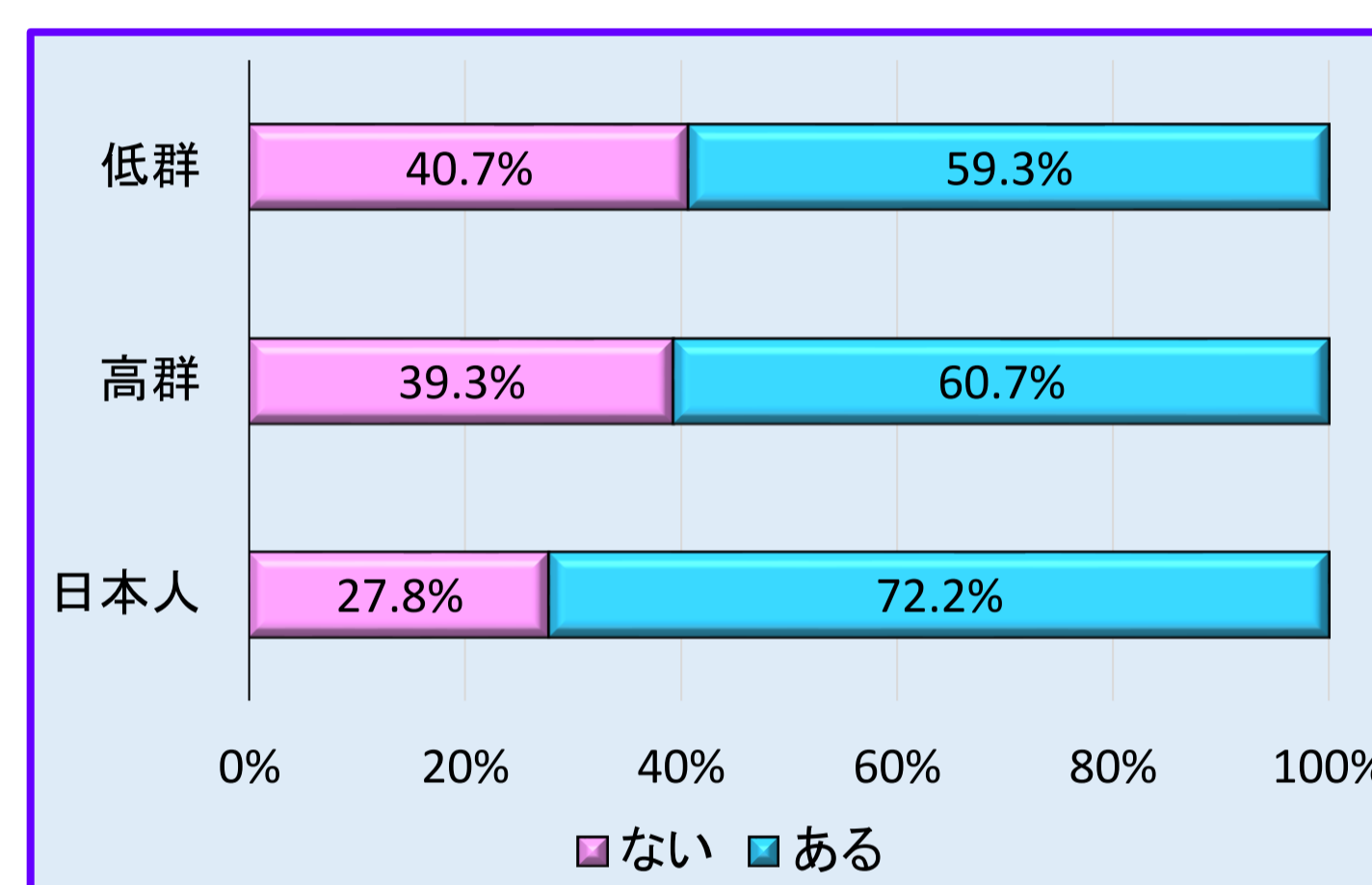


図2-3 ともだちはわたしのことをすきだとおもった

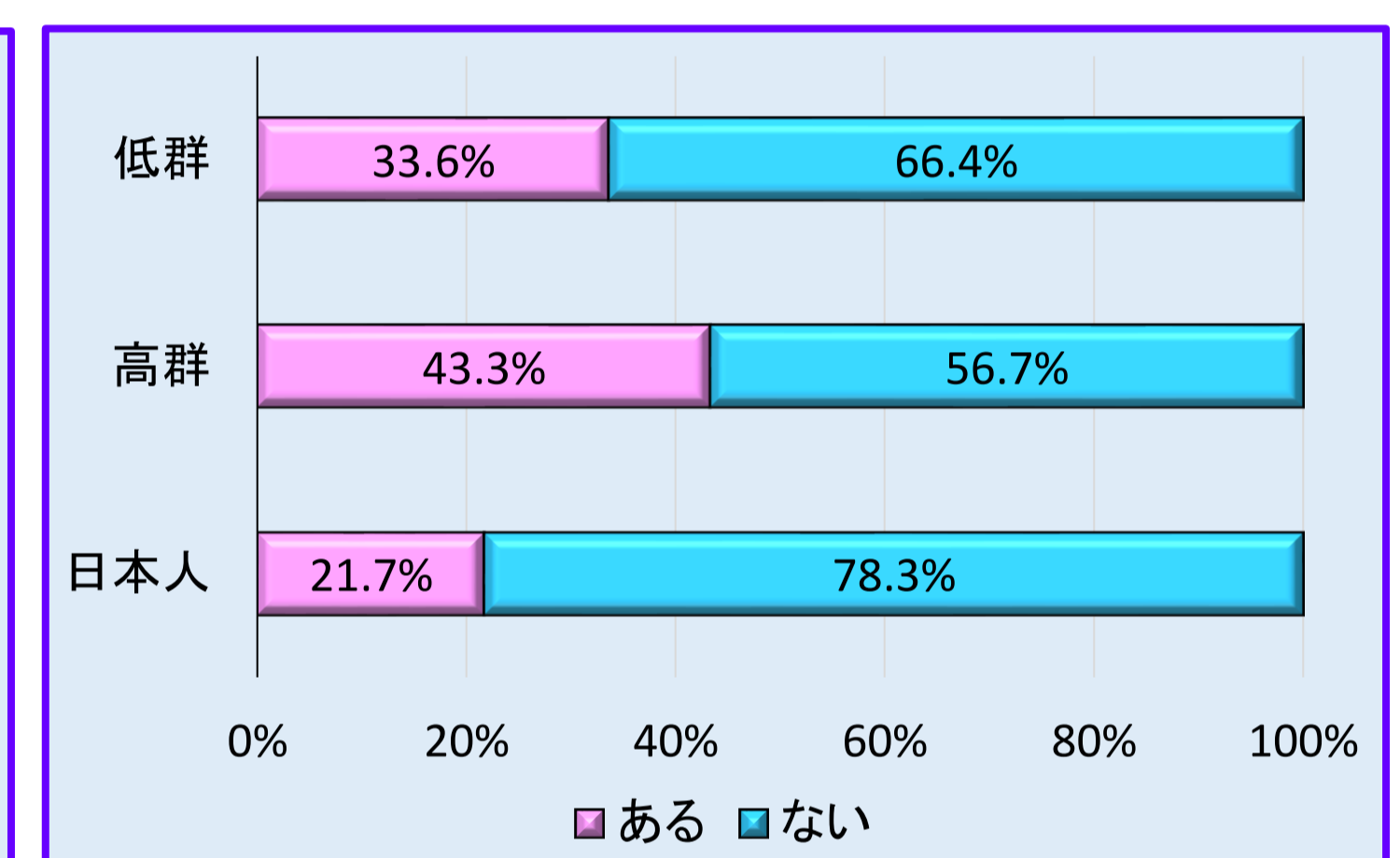


図2-4 かわっているようなきがした

- **学校生活**:「べんきょうはかんたんだった」(図2-5)では、低群に「ない」が多く、「テストでわるいてんすうをとらないかしんぱいしていた」(図2-6)では、低群と高群に「ある」が多かった($\chi^2(2)=28.01, p<.001$; $\chi^2(2)=39.85, p<.001$)。

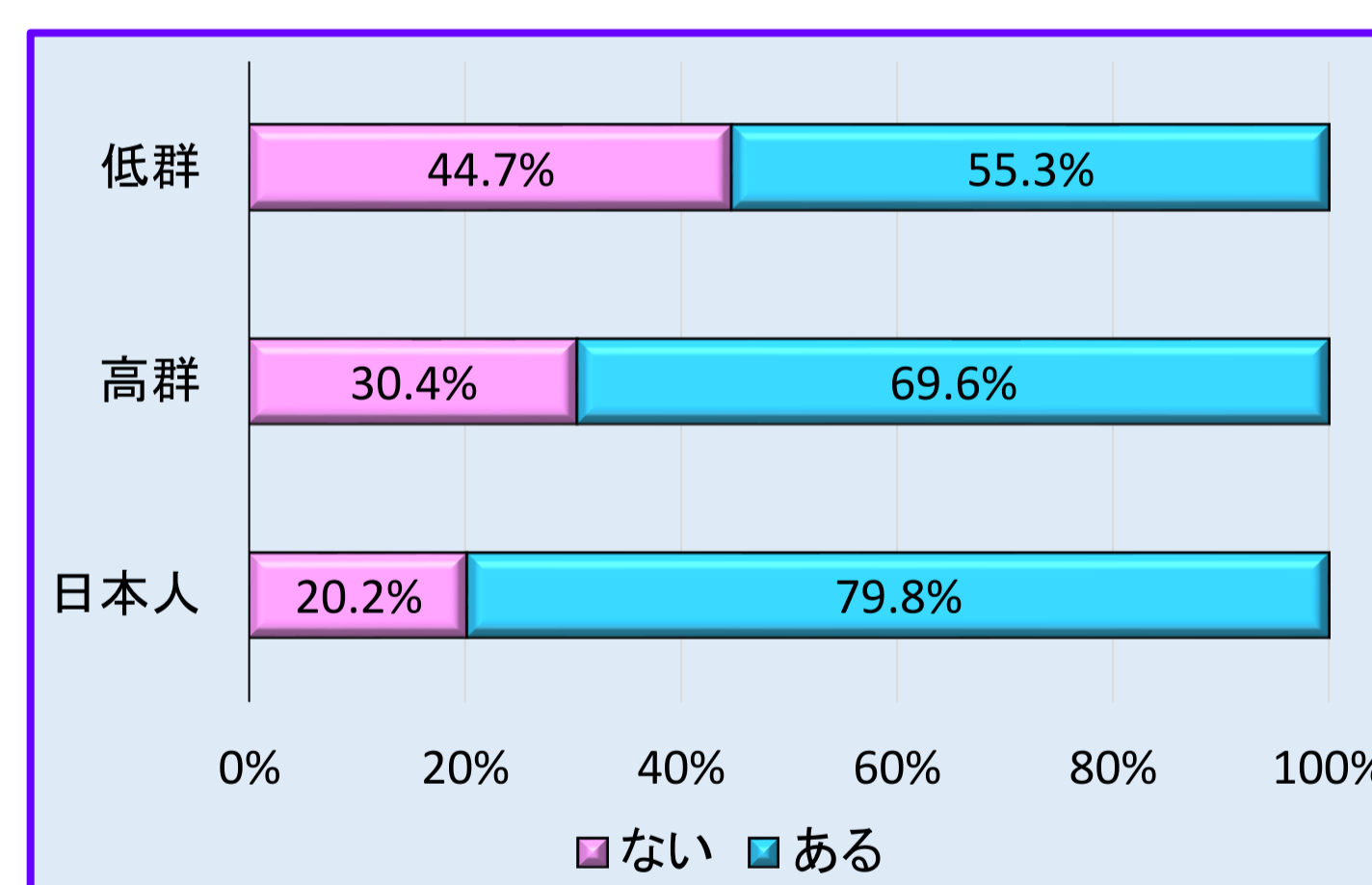


図2-5 べんきょうはかんたんだった

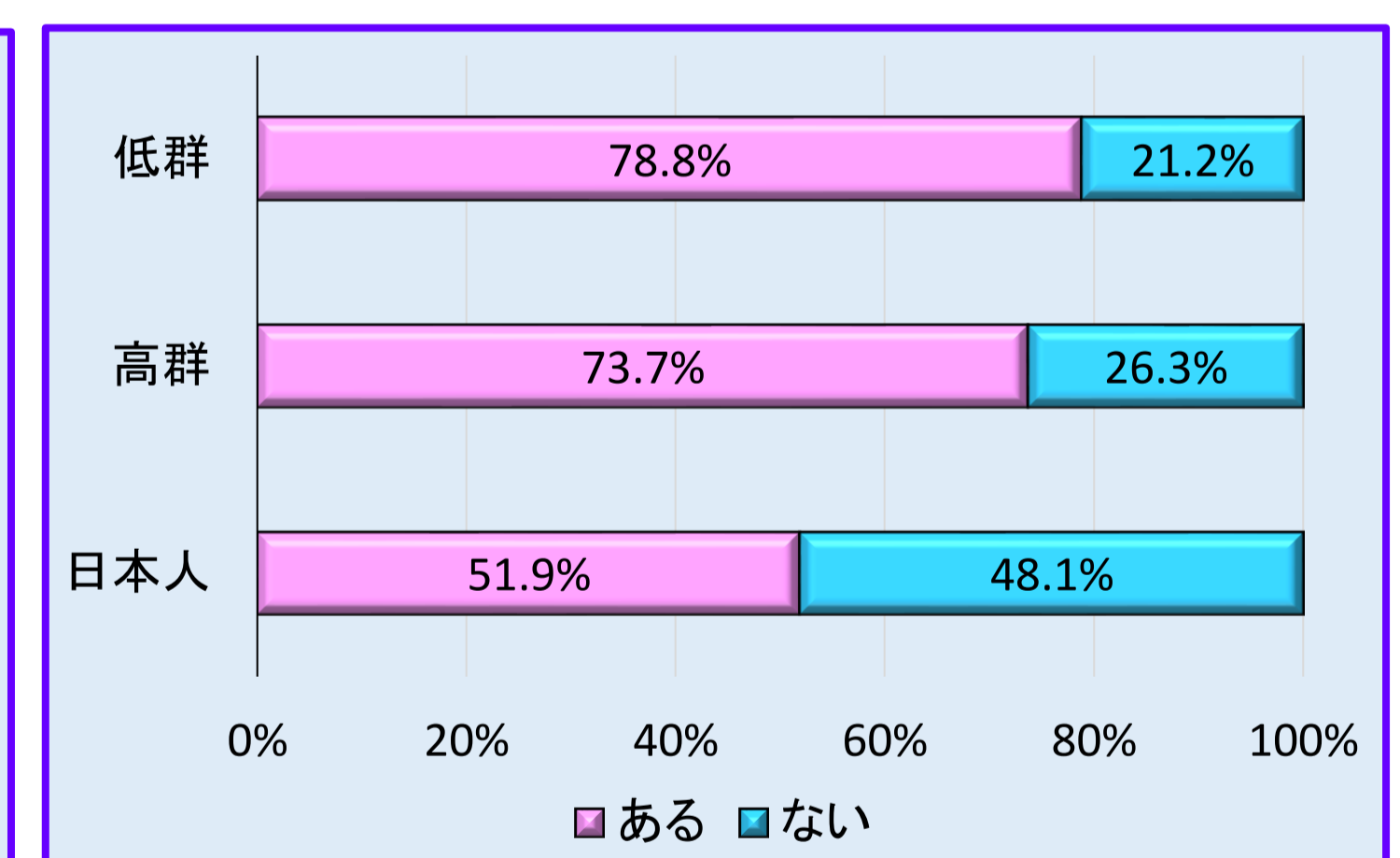


図2-6 わるいてんすうをとらないかしんぱい

考察

- QOL尺度の分析の結果、精神的健康と友人関係においては日本語能力の低い外国人児童の得点が低く、学校生活においては外国人児童全般の得点が低いことが明らかになった。外国人児童は日本人児童に比してQOLにおけるいくつかの領域に課題を抱えており、それらには日本語能力の水準が関連していることが示された。
- 項目ごとの分析の結果、蒔田ら(2011)と同様に、外国人児童は「学校生活」における勉強や成績に関する項目の得点が低いことが明らかになった。心理的な側面にも配慮しながら学習の支援を行うことが必要であると考えられる。さらに本研究では、外国人児童の中に漠然とした不安感や自己の異質性の認識の強い一群が存在することも示唆された。外国人児童が現在の環境に対する安心感をもち、ありのままの自分を認められるよう配慮することが求められるだろう。
- 今回は蒔田ら(2011)とは異なり、自尊感情における群間差は認められなかった。今後、学校ごとの環境や他の質的な調査結果も踏まえてより詳細に検討する必要がある。